

宗教的視点から見た中国と西洋の品格

〔『聞一多全集』第三卷 雑論〕

野村 英登 訳

中国と西洋の文化の違いについて議論をする際には、いろいろと異なった切り口から語ることができる。その中でも宗教から論じることが、間違いなく要点をついている。いわゆる宗教には、広義の意味もあり、狭義の意味もある。狭義の意味では、中国人に宗教はないといえる。だから我々がこの狭義の宗教の意味するところが何かをすれば、中国と西洋の文化の違いがどこにあるかを知ることができる。宗教が西洋人の性格を作り上げたのか、西洋人の性格が彼らの宗教を生み出したのか、これは卵が先か鶏が先かといった議論なので、ここでは問題としない。我々がはつきり認識しておくべきことは、宗教と西洋人の性格は不可分のものであるということである。

宗教の本質とは何かを規定するにあたって、もつともよい方法は原初の思考まで遡ることである。生への意志はおむね全人類の思想の根源である。人類の生活が原始時代に近づいていけば、それだけ生を求める意志は強烈になるが、その反面、生を求める能力は脆弱になる。意志と能力が反比例する傾向にあるのだ。能力が脆弱であっても、意志の強烈さは減少するどころか、かえって増加するのである。この能力と意志のアンバランスという困難にあつて、

人類は、主観的な「生の意識」によって、客観的な「生の事実」の不足を補填するようになった。言い換えると、ひたすら生を求めても、あいにくと生は完全でも絶対でもない。そこで、人類は「死の否定」によって「生の真実」を保証することにしたのである。それは人類の思想史の第一頁となり、実際すばらしい発明であったといえる。我々は、今でこそ誰もが死は確かな事実であると認めているが、原始人はそのように思っていないかった。彼らにとつては、死とは生の過程の別の一段階に過ぎなかった。彼らの祭祀に対する真剣さから、それは分かるのだ。彼らには根本的に死の觀念がなく、生を求める心があまりに切実なまま、突然に死という事実に行きあたっていた。そのため、意図せずして莊子が説いた「死生を一体とする」^① ような最高の境地に至った、とも言えるだろう。意図せずして、と言つたのは、莊子の場合には理性的な思考過程を経て到達した境地であったが、彼ら原始人には理性などあるはずもなく、ただあつたのは盲目的な生への渴望だけであつた。その渴望にあてられて、彼らの意識はすべて生の觀念によつて占拠され、生と相反する死の觀念が存在する余地はなかつたのだ。実際のところ、我々からみればそれは自己欺瞞である。しかしながら、原始人が過酷で危険な生存環境におかれていたことを考えてみると、生への觀念がなかつたとしたら、はたして彼らは生きのびることができただろうか。だから、人類の思想史の第一頁は死という事実の否定であると言つたのだ。そこである不死とはただ単に肉体の不死であつたことは、彼らの祭祀に対する態度からも証明できる。しかし知識がついてくるにしたがい、死を事実として受け入れざるを得ないようになった。では、死を受け入れたということは、生への觀念が低下したということかといえ、そうではなかつたのである。彼らは肉体の死は認めしたが、靈魂については依然として死ぬことはないという態度を堅持した。肉体の死を受け入れる代償として、靈魂の不死への信念を代替させたのだ。これは、事実としては譲歩であるし、その上つまらない自己欺瞞なのだが、原始人にとつてみれば、それはむしろ勝利であつたのだ。というのも、彼らは肉体よりも靈魂を価値ある存在としていたの

で、肉体の死を靈魂の不死と交換するのは都合がよかったのだ。つまるところ、原始人は負けを認めるどころか、逆に不死を言いつのつた。そして、あれこれと不死について語ったにも関わらず、結局、客観的には死は事実であるといよいよ承認せざるを得なくなつた。だから主観的にはますます不死への信念を強化することとなつたのである。彼らはいつたはどうしてこんなにも強情で、こんなにも頑迷だったのか。理性が弱かつたのだろうか。しかしこれは、理性が一段階發達し、肉体の死は事実であると承認して以降の現象であることに注意すべきである。理性の圧力が高まれば高まるほど、心の中の信念の働きはますます活発になつたようである。理性の發達は生への意志を妨げるところか、逆に鼓舞し、生を求める靈魂なるものを創造した。これが人類の思想史の第二頁で、いつそう荒唐無稽で、神奇靈妙な思想であつた。

人類が自己の靈魂から大自然の靈魂を連想するようになったのは、もとより思想の發展過程において極めて自然な成り行きである。この大自然の靈魂なるものは、実に人間自身の靈魂の投影作用であつた。そして自己を外部に投影することで、本来の自己よりも何倍にも偉大な存在とみなせるようになった。そして、生の信念を強化し生の努力を促進していく中で、人類はこの投影された自己を利用して自身の助けとするようになったのである。この複雑でもつてまわつた段取りを考えついたのは、まったく驚くべき人類の「比類無き愚かさ」であり比類無き知恵であつた。どういうことかという、現代人については自身の無能を認めるようになったのだ。それは理性が昔よりいくらか發達したことで、より多くの客観的な事実を理解するようになったからであるが、では、これは敗北を認めたのだろうか。そうではない。人は無能だが、逆に万能の神を創造したのである。万能な存在が無能な存在から生まれたのだから、これは無能な存在が万能であつたということだ。現代人が頭を垂れるのは、たんに自分に対して頭を垂れているだけ、頭を下げればそれだけ、自身の地位も高くなるというしかけである。どんな方法を使つてもそんな人間を屈服さ

せることはできない。というのはそんな人間は鉄のごとき生への意志を持つてゐるからだ。鉄は打ち鍛えればそれだけ堅強になるものである。これが人類の思想史の第三頁で、理論面ではますます牽強付会、支離滅裂となつたのだが、実用面では不可思議な奇跡を發揮することになつたのは認めざるを得ない。

もしも、賄賂を使つた祭祀を手段にして、あるいは神からの幸運を呼び寄せ、あるいは神からの災厄を断ち切つたり、あるいは時に恫喝のような手段さえ惜しまず神に何かをさせたり、させなかつたり——と、神への態度がこのようなものであれば、神の力をあまりに小さく見積もつてゐることになる。人が神の力を低く見てゐるといふことは、実は自分自身の能力を低く見てゐるのである。正確を期せば、恫喝と賄賂によつて操作できるような対象は、妖魔や精霊と称する類の存在に過ぎず、神ではないのだ。だからこうした信仰はたんなる迷信でしかなく、宗教ではない。宗教の崇拜する対象とは、必ず至高にして無上の、神聖なる、万能にして慈愛の神であつて、人はただ無条件に帰依し敬虔に祈るだけなのである。人はその信ずる神が全徳かつ万能であればそれだけ、自身が全徳かつ万能であることができる。というのも、神は人間が自らを投影した自分自身の影だからである。神は人間自身をかたどるのだから、人格神であつてよいというか、必然的にそうなつてしまふ。神の姿が人間自身に似ればそれだけ、神が人間の創造であることの証明になる。まさに神の権力が強大であればあるほど、人間の権力もそれに反映して強大なものとなるのである。つまるところ、神は信仰する人間にあまり似ないようにはならない。全く似なければ、その神と人は無関係である。またあまり似るようにもならない。似すぎると自身の精神の力がどの程度までしかないかが露見してしまふ。似すぎも似なさすぎもしない、全徳と万能の人格神こそが、過不足のない適当な信仰であり、そうした信仰が宗教と見なしうるのである。

これまで述べた宗教思想の発展段階とその性質にもとづけば、中国人と西洋人のどちらが宗教を有しているか、い

ないのかは簡単に弁別できる。第一に、不死の問題については、中国人は当初明らかに肉体の不死の観念しか持っていなかった。だから一方ではあんなにも祭祀と葬儀を重視し、他方では不老長生や白日昇天といった神仙の観念を併せ持っていた。靈魂の不死の観念は、本来持っていなかったのである。我々の靈魂の観念は外来のもので、どうもいささか曖昧なところがあるのだ。⁽²⁾ 第二に、我々の神で下位に属する存在は、妖魔や精霊ではなく、人間の死者が変化したものである。だから我々自身に似すぎている。上位に属する神といえば、「二道」のように、観念的な神であつて人格神ではない。だから我々自身と似ようがない。本来的に靈魂の観念もなく、全徳かつ万能の人格神もないので、我々には宗教がないことになる。我々の品格と西洋人の品格とで根本的に相違する点はおそらくここにあるのではないだろうか。我々が死は死でしかないと言うが、彼らは死とは生のことだと言う。我々が人は人でしかないと言ひ、現実の前で屈服するが、彼らは屈服しない。だから彼らに宗教はあるが我々にはないといえる。

ここまで何度か生への意志について触れてきたが、これは大変重要な論点で、問題の核心かもしれない。往々にして弱者が宗教を必要とすると言われるけれども、実際は、強者が宗教を創造し、生への情熱が高まり、生への意志を強くできるように、弱者を助けたのである。個人のレベルでは弱者が宗教を必要とする。しかし社会のレベルでは、強者がより弱い仲間を率いて、組織的に完全に絶對的な生の追求へと向かわせるために宗教を必要とするのだ。これは社会の健全さの現れではないだろうか。宗教自体には数え切れない欠陥や弊害があるが、宗教を生み出した動機が健全なものであつたことは疑いない。西洋人の愛国思想や恋愛哲学、ひいては科学精神に至るまで、それらはすべて彼らの宗教の産物である。彼らは国家や恋人や科学の真理を「神とあがめている」と言われることがあるが、決して言いすぎではないだろう。すくなくとも彼らの宗教を生み出した原動力は、愛国思想や、恋愛哲学や、科学精神を生み出す原動力でもあつたのだとはいえる。彼らの生は、その場限りの間に合わせで、飢餓と死の狭間にあつて死にか

けている中によく生きようとするものではない。完全で、絶対的で、激しく生きようとするものである。また彼らの生は、互いが譲歩し少しずつ不満をおさえて折り合おうとする、いわゆる「中庸の道」のような実質的にある種の虚偽に過ぎないものでもない。ある意味言葉通りに、相手が死に自分が生きるのだから死に相手が生きるのでないという徹底的で真剣な生である。これは現世において失敗しても来世において成功するという、決して負けを認めない、決して屈服しない精神である。これが西洋人の性格である。この性格は彼らの宗教においてもっともはっきり現れており、だから清教徒のアメリカ人においてもっともよく体现されているものである。

人生というものが、もしも、食べて寝て、時候の挨拶を交わして、あるいは商売で値上がりを期待して買い込んだり、あるいは私腹を肥やすために不正を行ったりするだけなら、宗教は必要ないかもしれない。しかし、人生には深刻な事態も訪れるもので、小さな危機では不快に感じ、大きな危機ではそっくり命を失うことがある。危機に直面したとき、対応する力がないように思っている、往々にして実は対応する力があつたりする。これは、人間は誰でも不可思議な潜在能力を秘めているからである。問題はどんな方法でその力を引き出すかだが、たいていは胸をはって、歯を食いしばり、思いをめぐらせて、何とか力を引き出すものである。潜在能力を呼び覚ませば、山も押しつけ海もひっくり返せ、何一つできないことなどなくなってしまうだろう。それは技術ではなく、魔術なのだ。それが宗教なのだ。他方、中国人のやり方は、深刻な事態から身を守ろうとするものである。危機的な事態の発生を防ぐことで、自分に対応する困難さを避けるのだ。これは現実に関心がある自分が解決できるどうかはひとまずおくということで、それでたとえ解決できたとしても、西洋人からすると、なんともなさげなく、どうにもいくじなしに見えるだろう。彼らにとつては、結局は深刻な事態など存在しないのだ。それどころかわざわざそういう状況を作り出したりする。危機において必死に何とかすることを楽しむのが好きなのだ。何もないところで自分で火事をおこして自分で消したりする。消

火作業の緊張感がたまらなからである。消火に失敗して逆に自分が焼け死んでも、それは殉教者の栄光であって、人生の至福なのだ。——なんと荒唐無稽な、それではたんなる狂人ではないか。そう言われるだろう。その通りなのだ。だが、そう言う人は決して気を狂わせたりせず、生活に狂気が欠いている。だから平凡で懦弱なのだ。他人が天上を飛んでいるとき、自分は肥だめの中ではっているのだ。

中国と西洋の品格を比較する試みだが、さて、自分たちのどこをもって彼らと比べればよいものだろう。勝負になると思えるだろうか。たとえ美辞麗句を並べても、卑小で、平凡で、臆病で、嘘つきな自分自身を隠しおおせるものではない。そろばんずくだったり、こそこそとしていたり、私利私欲で動いたり、あらゆる醜態を隠しおおせるものではない。孝悌や忠信、礼儀や恥を知る心など古の聖賢のどんな哲学も吐き気を催すだけだということは、私にはお見通しである。かといって、靈魂もなければ神の国もないし、国家という観念も持っていない。まとまりのない、ばらばらの砂粒である。何が愛かも知らない不能者の集団なのだ。だから何が憎しみかも知らない。共感することもなければ、真理の観念もない。ところが中国人はちよつとばかり小賢しくて、繁殖力が高いのである。小賢しいから、こそどろをして——私腹を肥やすために不正を行ったり、商売で値上がりを期待して買い込んだりする。繁殖力が高いから、幾千幾万の同胞を単色の破れた綿入れの上着にくるまったまま、番号順に並ばせて、彼らの血を吸い尽くし、餓死や病死に追い込んでいるのだ。……これが中国人の品格であり、仁義道德なのだ。そのどこが西洋人と比べものになるだろうか。

宗教というかたちがなくても心配ない。ただ宗教を生み出すような、決して屈服しない、永遠に向上を求める精神さえ、ようするに、あの鉄のごとき生への意志さえあればよいのだ。それがあれば、宗教以外のどんな方向へ発展していくてもかまわない。おそろしいのは、その意志が早々と干からびてしまうことだ。というのも、平凡主義の儒家

哲学を除いては、宗教がないどころか他のものさえないからだ。もつとおそろしいのは、宗教を手にしても、平凡で、うそつきで、ちつぽけなこそどろの道具になってしまふことだ。さらにおそろしいのは、敗北主義を前提とした人生で、「仕方ない（没有办法）」という典型的な言いぐさで、ただ嘲笑して皮肉をとばすだけしかししないことだ。そう、小賢しく、繁殖力があるから、こうして生き延びていられるわけだが、それを言うならネズミやハエだつて生きてはいる。しかしそれは真に生きているのではない。最初から死の事実を認めているのだから、死をおそれることは歴然としている。そして死をおそれているから、生もおそれている。見込みのない四億五千万人⁽³⁾なのである。

（原題「從宗教論中西風格」『生活導報』第六五期、一九四四年四月二三日初出）

注

- (1) 徳充符篇に老聃の言として「以死生為一條」の語がある。
- (2) 「道教の精神」や「神仙考」に詳論がある。
- (3) 当時の中国全土の人口から、全中国人を指しているときこの語をしばしば使った。